

そっとしてきた『百年』の意味

朗読者 中澤 裕子

5 「五十年前の、大学生の時に初めて出会った『同和問題』が、人生の大切なテーマのひとつです。」というそのだひさこさん。今日は、そのださんが感じてきた、とても大切な思いをお伝えします。

10 私は、中学校の教員をしながら、大学の講義を担当することになり、部落問題論や同和教育論などを二十年間担当してきました。私は講義の初めに、必ずアンケートをとります。同和問題について、自由に意見を書いてもらうのです。

15 さて、皆さんはどんな意見が多いと思いますか？
ほぼ毎回、圧倒的に多い意見は、「なぜ、今ごろ同和問題をとりあげないといけないのか」、とか「そっとしておいた方がいいのではないか」という意見なのです。これは「寝た子を起こすな」という考え方です。ラジオをお聞きの皆さんの中にも、この考えに賛成という人がいることでしょう。

20 この考え方は、とても根深いと、私は感じていました。その原因のひとつは、以前の同和問題の授業の不十分さがあったと思います。また、日本社会の歩みにも原因があるのではないかと、私は感じて
います。日本で身分制度を廃止する「解放令」が出されたのは、明治四年のこと、学校で同和問題を教えるはじめたのが、昭和四十七年。身分制度が廃止されてから、何と、一〇一年後なのです。寝た子を

起こさないで、差別を放置したままの百年の時間。それを取りあげないことが“ふつう”で過ごしてきたのです。

25

しかし、教育において、同和問題を積極的に取りあげてこなかったその百年は、差別を受けて来た人たちにとってどんな百年だったのでしょうか。どんなに辛く、長い百年だったことでしょうか。

私は、そつと放置しておくことでは、決して差別は無くならない、と強く感じています。

30

同和問題については、特別措置法による地域改善対策、人権教育・啓発などの様々な取組の中で、差別解消に向けて一定程度進んできています。しかし、現在でも、インターネットへの差別書込みや同和地区の間合せなどがあります。私たち一人ひとりが学び、正しく理解することで、同和問題の早期解決を図って行きましょう。

35